

いじめや不登校に対応できる校内体制の整備 ～いじめ・不登校への未然防止及び早期対応の推進～

栃木県さくら市立熟田小学校 沼尾 昇

I 現状と課題

日本が人口減少時代を迎えており、さくら市の人口は増加傾向にある。2008年に42,839人であった人口は、2018年11月現在で44,807人となっており、約2,000人の増加である。児童数も増加しており、市内に6校ある小学校のうち2校で校舎が増築されており、2019年度にもう1校で校舎増築が予定されている。家庭環境や発達状況に課題のある児童も増えている。そのため、自尊感情・自己有用感の低下もみられる。それに伴い、いじめ件数や不登校児童数も増加傾向にある。このような状況への対応が喫緊の課題である。

II 研究の概要

1 いじめ・不登校の未然防止及び早期対応の取組

(1) 教職員としての心構えの確認

校長が、教職員向けに定期的に通信を発行し、朝の打合せ、職員会議等で児童を教育するための教職員としての心構えを確認している。

その際は、校長としての考え方を一方的に押し付けるのではなく、校長のこれまでの経験などを通じて、教職員に問題提起し教職員自身が意欲的に取り組める内容としている

(2) 自尊感情・自己有用感を高めるための可視化

自分が好きで自身の存在価値を感じている児童は様々な場面で全力で一生懸命に取り組むことができる。そのため、自尊感情・自己有用感を高めることが、いじめや不登校の未然防止につながると考えている。

そこで、学校のすべての教職員が、児童の成長や成功を認め、肯定的評価の言葉かけをするとともに、そのよい行いを学校だよりやホームページ、廊下の掲示等で紹介し可視化を図っている。

(3) 学級経営の充実

誰もが安心して過ごすことができ、居心地のよい学級をつくることが、いじめ・不登校の未然防止には大変重要である。

さくら市では、すべての小学校の3~6学年において、Q-U検査を実施している。その結果を受けて、学級の状態・人間関係を把握するとともに、課題や悩みを抱えている児童の把握を行っている。そのことで、学級の雰囲気の改善を図ったり、配慮・支援を要する児童について、全職員で情報を共有し課題解決に向けて組織的に取り組んだりしている。

(4) 特別活動の充実

児童会主催による異年齢集団による交流や縦割り班での清掃等を通して、人とかかわりながら共に活動す

る喜びや楽しさを味わわせるとともに、協力し合い助け合う精神を育むようにしている。

(5) ケース会議の工夫

いじめや不登校の未然防止のために、あるいはいじめや不登校が発生した場合の対応において、組織での対応が大変重要である。その対応の要となるのがケース会議であると考えている。実効性のある有効なケース会議となるように、工夫を図っている。

① 情報収集の工夫

- ・いじめや不登校につながりそうな児童の予兆にいち早く気付くための「気づきのシート」の活用
- ・情報を共有するための「お知らせメモ」の活用
- ・定期的に情報を共有する場の設定

② ケース会議のもち方の工夫

- ・①のような工夫により収集した情報を使い、ケース会議での協議の視点や対策の見通しをもって会議に臨む。
- ・会議では、設定された視点に基づいて参加者が意見を述べ、提示された支援策はホワイトボード等に記入し確認したり修正したりする。
- ・最後に、児童や保護者への支援や状況を改善するための方策をできるだけ具体的な形で共通理解する。
- ・決定事項は、すみやかに実行していく。
- ・必要に応じ、外部機関の方々にも参加してもらい連携を図る。

III 成果と課題

1 成果

- (1) 児童は自尊感情・自己有用感が高まり、いじめ・不登校の未然防止につながっている。
- (2) 教職員が、熱意、愛情をもって指導・支援を行うことにより、望ましい方向に進んでいる児童が多くなっている。
- (3) ケース会議を工夫するなど、組織での対応をしやすくすることで、児童への指導の効果が上がっている。

2 課題

- (1) 学校だけでは対応が困難な事案も増加していることから、保護者や関係機関との連携は、今後より一層強化していく必要がある。

IV 提言

校長は、いじめ・不登校に対して、常に高い危機意識をもち、教育的愛情にあふれた教職員が、自尊感情・自己有用感の高い児童を育てることで、児童が笑顔で楽しく安心して過ごせる学校経営を行う必要がある。